かえる便り 28年30号

平成２９年２月６日

春寒の候、皆様にはますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

多くの１・２年生は県大会出場の経験がありません。その上に技術・体格・判断力のレベルが低く、練習試合でも負けてばかりでした。昨日、新人戦の初戦を終えましたが、何とか勝利することが出来ました。日々、言い続けてきたことを予想以上に発揮する努力をしていました。今週から格上チームと対戦しますが、もっと戦う姿勢を前面に出しファイトしてくれることを期待しています。悪天候の中、多くの皆様にご声援をしていただきありがとうございました。また、差し入れをしていただき本当に助かりました。引き続きご声援をお願いいたします。

「医師からの余命宣告は淡々としたもの。
――残された時間は４カ月。
自分の命の終わりを宣告されたら、ひとは何を考え、残りの日々をどう生きようと思うのだろう。」
下記はある人の生きざまです。彼の人柄が素晴らしいから、多くの人が最後まで彼を支え励ましたのだと思います。人は人により成長します。余命４か月の彼の行動から学ぶことが多々あると思います…

「ガンとの闘いに体力を奪われ、普通なら歩いて 10 分程度の駅までの道を、7、8 回休憩しないと行けなくなったと言い、1 時間以上かけて歩いていく。タクシーで行くように言っても聞かない。苦しいのになぜそうまでしてと、わたしは思った。（略）いつもと同じように普通に、今まで通りに暮らしたかったのかもしれない。

その後、彼の体調が悪くなるにつれ、会社で任される仕事は減っていったようだった。それでも、彼はどんなに小さな仕事でもうれしかったらしく、一生懸命に取り組んでいた。

「みんなさあ、優しくて、すごくいい職場なんだよぉ。僕なんかさあ、もうできる仕事なんかほとんどないのに､嫌な顔ひとつしないで居させてくれるんだよ｣と言い、心から感謝していた。

仕事は生きる糧だ。

生きるためのお金を稼ぐというだけの意味ではない。

社会とつながり、仕事を通じて自分が人や会社や社会といった、誰かや何かの役に立っているという喜びがそこにはあるのだろう。思うように働けなくなってしまっても、いや、自分の生命の終末を見つめたからこそ、彼は出社をヤメず、社会とつながり、生きている実感を求めていたのではないかと思う。」